ブラスを通して言葉が音楽に変わる

音楽家　福井健太

「ブラスバンド」と聞いて皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？

今、日本では「吹奏楽」を想像される方がほとんどでしょう。しかし残念ながらブラスバンドと吹奏楽は似て非なるものです。ブラスはご存知の通り真鍮の英名。したがってブラスバンドは文字通り真鍮で作られた金管楽器の楽団となります。

しかし、吹奏楽は英語にするとWind BandやWind Orchestraとなり、吹く楽器（金管楽器と木管楽器）の楽団を言います。日本ではアマチュア吹奏楽団や学校の吹奏楽部をブラスバンド、略してブラバンなんて言ったりするからややこしいですけど。

今回随想を書かせていただくことになった私、福井健太は音楽家でありサクソフォンプレイヤーでもあります。

サックスは金管楽器だからね、と思われた方が大半だと思います。実際私もそのように考えていましたが、楽器は素材ではなく発音方法により分類されます。金管楽器は唇を振動させ発音する楽器で、代表はトランペットやホルンのようなラッパです。木管楽器はその他の方法で発音する楽器です。フルートのように空気の流れをぶつける方法と、葦で作られているリードを振動させる二通りが主です。サックスはこのリードを振動させ発音する方法なので木管楽器なのです。しかし木管楽器であるサックスの管体はほとんどがブラスで作られています。

金管楽器の歴史は古く紀元前にまでさかのぼりますが、サックスの歴史はとても浅い。金管楽器の歴史を紐解くといかに人類が金属をうまく加工してきた事に驚きます。現代でも最も難しい金管楽器のひとつがトランペットです。その昔トランペットは王族や貴族しか演奏する事が許されなかったそうです。プスプス音が外れて上手に演奏できなかった王様もいたかと思うとなんだか微笑んでしまいます。

楽器全部について書き始めると本一冊分になってしまいますので、この辺でサックスに話を戻します。金管楽器の職人であったアドルフ・サックスが、金管楽器の音量を持ち木管楽器の機動性を追求し発明したのがサクソフォーンです。彼の名前、Saxに楽器の意味であるPhoneを足しSaxophone（サクソフォーン）という名称になりました。記録によると一八四八年にパリで特許が取られています。

金管楽器は一五世紀後半ごろまでは金や銀、銅の無垢材で作られていました。その後複雑な加工をするため真鍮へと変わっていきましたが、サックスは音楽史的にも楽器史的にもごく最近誕生し、生まれた時から真鍮で作られた楽器です。

サックスはとても新しい＝未熟な楽器ですが、子供が様々な可能性を持っているように、未熟だからこそ可能性を持っています。構造や材質もどんどん進化してきました。構造的には六〇年前くらいから現在の完成系に近く、ここ数十年で増えた音域も少ないのですが、材質、材料に関しては今も日々進化しています。

元々サックスは、木管楽器らしい早いパッセージを演奏できることと、軍楽隊が行進曲を演奏するのに十分な音量があるという特徴を持っています。また、その独特な音色から発明後すぐにヨーロッパやアメリカ

の作曲家がオーケストラの楽曲に取り入れるようになりました。一八七二年ビゼー作曲「アルルの女」が最初と言われています。二〇世紀に入りムソログスキー作曲「展覧会の絵」ラヴェル作曲「ボレロ」ガーシュイン作曲「ラプソディーインブルー」などでも独奏楽器として書かれています。ジャズで使われるようになったのはそれより後です。

初期のサックスは真鍮にクリアラッカー仕上げもしくは、銀メッキ仕上げが主流でした。当時のラッカー塗装はお世辞にも良いとは言えず、すぐに剥がれてしまい、銀メッキ仕上げの方が重宝されたようです。現在ではラッカー仕上げの技術も良くなりほとんどの楽器はクリアラッカーもしくは、イエローラッカー仕上げになっています。ブラックラッカーやホワイトラッカーなんて変わり種も存在します。数年前北京の楽器メッセに行った時には仕上げがピンクやら緑、青や赤という中国メーカーの力作を見ました。ラッカーというより塗装です。音は「振動」ですからそれを考えると無い方が良いのでは、というのが素直な感想ではないでしょうか?

仕上げについてはラッカー塗装かメッキ(金、銀、ニッケル等)が今でも主流ですが、管体の材質は様々です。イエローブラス、レッドブラス、白銅、金、銀、等々。同じ真鍮でも銅の割合を変える事により様々な音質のキャラクターを作り出しています。

メーカーそれぞれのこだわりで、どの素材を使うかをとても重要視しています。サックスプレイヤーとしては、ダークなサウンドなんて言ったりしますが、銅の割合が多くなればなるほど落ち着きがあり柔らかい音色になるという印象です。また銅の割合が少なくなると硬質で明るい音色になるように思います。現代のサックスはより音量や機動性を追求しているため後者の音色を良しとして材質を選ぶ傾向が強いのですが、よりクラシカルなサウンドを求め、ブロンズブラスという素材を使っているメーカーもあります。

私たち演奏家の楽器選択はブラス=真鍮の選択から始まります。材質の選択が自分の演奏スタイルや求める音色の選択に直接つながりますから。管楽器の真鍮は毎日演奏されたりすると劣化しますが、サクソフォーンは最初にアドルフが作ったサックスが現在でも演奏できる状態で残っています。

他の管楽器に比べサックスは六〇年近くも前の楽器がビンテージ楽器として新品の何倍もの価格で取引されています。しかし、同じメーカー、同じモデルのビンテージ楽器でも、フランス製とアメリカ製は全く違った楽器として扱われています。その違いは材料にあり、アメリカ製の金属を使ったモデルは今でも名器として人気があります。その時代にその材料を使った他の金管楽器も同様に、高い価値があると言われているほどです。

私たち管楽器の演奏家は真鍮製の楽器と供に人生を歩んでいます。所詮道具といえば道具ですが、その道具が私たちの言葉を音楽に変えてくれます。私の言葉もサックスを通してひとりでも多くの人に伝えられるよう、今日も四kgのアルトサックスを抱えて出かけます。

音楽家
福井 健太
(ふくい けんた)

静岡県浜松市出身、東京芸術大学卒。幼い頃から様々な音楽や楽器に触れ、中学時代にサックスに出会う。「必要な音や音楽を必要なところへ」と意欲的に活動している。あらゆるシーンで活躍する演奏家として、テレビから福井の音を聞かない日はない程です。

NHKみんなのうた「コイシテイルカ」の管楽器アレンジを担当2009年10月に劇場公開された映画「アルビン号の深海探検3D」の音楽をプロデュース。

HOME PAGE
http://web.mac.com/kentax1/

photo by Natsuki Karen